

帰命無量寿如来

岐阜教区第15組 岩佐 善夫

正信偈、冒頭の「帰命無量寿如来」それは、量りしれないいのち、かけがえのないいのちに目覚めよという、如来からの呼びかけです。その七文字は、私達の生活を照らし、その姿を明らかにする光として、輝きを増していると思うのです。

今年、本山・女性室が、性差別などの問題を考える、カルタを作ったことを知りました。面白いものばかりでしたが、特に次の一枚が、強く心に残りました。

「た」「『誰もおらんのか！』あんたに私がなぜ見えん！」

この一枚、近所のお婆さんの嘆き、怒りとびったり重なっていたのです。

そのお婆さん、ある日、息子夫婦が外出するというので、留守番をすることになりました。耳が遠くなり、人との対応に自信がなくなっていたので、嫌々引き受けた留守番仕事でした。来客がないことを祈りながら部屋にいた時、玄関のチャイムがなったのです。重い腰を上げて玄関の戸を開けた時、訪れた来客が投げかけた言葉が「誰もおらんのか！」だったのです。

現に私がいるのに「誰もおらんのか！」とは。私を何だと思っているのか、私を人として見ていないのか、と嘆きと怒りがこみ上げてきたというのです。

訪れた人は、少々失礼ではあるが「この家には、話の分かる人はいないのか」といいかけたようですが、お婆さんの心を深く傷つけてしまったのです。

人は、人としての尊厳をないがしろにされたとき、嘆き怒る。それは、よく考えれば、無量の縁からいただいたいのちが私を通して、嘆き怒っているのではないのでしょうか。

宗祖 750 回御遠忌のテーマ「いのちがあなたを生きている」が思い出されます。私となって生きているいのち、それ自身がないがしろにされ、嘆きの声、怒りの声を上げているのです。

6月23日は、沖縄「慰霊の日」でした。72年前の沖縄戦における戦死者の数は20万を超すと報じられていました。おびただしい数のいのちが、無造作に奪われていった筆舌に尽くしがたい惨事が、現実にあったことを教えられます。そのことを祖父や祖母から聞いて育った、高校3年生の上原愛音（ねね）さんが、「平和の詩」を朗読しました。詩の最後は「おばあ達が見守る空の下、私達は誓う。私達は今日を生かされている。」と結んでいました。彼女は「量りしれない、かけがえのない、いただいたいのち、大切に」という声を若い感性で聞いたのでしょう。

いのちが無量の縁からいただいたものであることを忘れ、その尊厳が脅かされることに無関心になっている私達。聖人が「帰命無量寿如来」と表白されたお心、さらに深く頂きたいと思う所です。